

1 研究の背景

近年のナノサイエンスの発展により、原子や分子、光子を量子1個のレベルで精密に測定し、制御することが可能になってきた。当研究室では、このような高い制御性を有する系での量子多体問題の解明と、その基礎となるナノスケールの熱力学・統計力学の構築を目指して理論研究を行っている。さらに、物理学と人工知能との融合を目指した研究も行っている。

2 最近の研究テーマ

【冷却原子気体】

真空中にトラップされた極低温の原子気体は、原子間相互作用の強さを含むほとんどすべての物質パラメーターを自在に変化させることができる究極の人工量子物質であり、様々な物理現象に共通する普遍的な法則の探究が可能である。例えば、極低温で実現される巨視的量子現象であるボース・アインシュタイン凝縮のダイナミクスには、超新星爆発や宇宙初期の相転移とも類似した現象が現れる。また、原子気体の時間発展を正確に追うことで、孤立系がいかに熱平衡状態に至るかという統計力学の基本的問題を研究することもできる。私たちは冷却原子気体を題材に、様々な量子多体物理の解明を目指して研究に取り組んでいる。

最近の研究では、量子開放系における非平衡ダイナミクスおよび量子多体問題の解明に取り組んでいる。量子系のダイナミクスはシュレディンガー方程式によるユニタリなもの測定による非ユニタリなものに大別される。冷却原子気体においては量子気体顕微鏡を用いて多体波動関数を1原子のレベルで精密に測定することが可能であり、さらにコントロールされた散逸を導入することで非平衡開放系を研究することができる。このような系において量子測定の反作用が引き起こす非ユニタリダイナミクスが従来の多体物理をいかに変更するかという基本的な問題のみならず、より広い意味での非平衡開放系における普遍性や相構造を研究している。最近、私たちは、非平衡開放系の重要なクラスの一つである非エルミート系で実現するトポロジカル相の分類を行った。さらに、非エルミート系の数理をより一般の開放系へと適用することで、量子多体系に対する測定や散逸が引

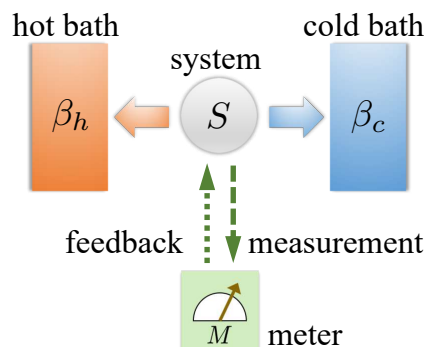
き起こす磁性・超流動・臨界現象の基礎の確立も目指している。今後、冷却原子気体は非平衡量子開放系や統計力学の基礎原理を検証する舞台として、様々な分野にまたがる学際的な研究に発展していくものと期待される。

【量子論・統計力学と情報理論・人工知能の融合】

私たちは情報をキーワードとして量子論や統計力学の基礎づけとなる研究を行い、さらに情報理論と量子論・統計力学を融合することで新たな学問分野の構築を目指している。例えば、測定やフィードバック制御下での熱力学第二法則や揺らぎの定理の一般化、量子力学固有の相関である量子もつれを用いた熱機関、量子測定における情報の流れなどの研究に取り組んでいる（下図）。これらの研究は、量子・熱揺らぎや測定の反作用が無視できない微小非平衡系の研究の基礎を与えるものと期待される。他方で、機械学習や深層学習における情報処理のプロセスは、物理学や統計力学の概念と密接な関連がある。私たちは最近、物理学の視点から機械学習の理解に取り組み、物理学と人工知能の融合を通じた新しい学問領域の創出を目指している。

3 今後の展開

情報（認識）・数学・生命を含む広い視点から、物理現象の基礎学理の理解とその普遍性を探究する。



図：測定・フィードバック制御下の熱機関の概念図。私たちはこのような状況に対して成立する熱力学的不確定性関係を導出し、最近の実験結果を説明することに成功した。Phys. Rev. Lett. **125**, 140602 (2020) より転載。